

顔学

原島博

東京大学大学院教授

◎◎当連載では、比較的新しい学問分野について、その第一人者をお訪ねし、従来の学問とは違う新しい世界の見方を学びたいと考えています。第一回目の今回は「顔学」ですが、顔というごく当たり前のものを学問として扱っている点が、とても面白いと感じました。

原島●確かに顔というのは、私たちにとって当たり前のものだけれど、皆、大変強い関心をもっていますね。特に対面した相手に、さまざまな印象を与える顔は、コミュニケーションにおいて重要な意味をもつ。顔を見れば、その人となりがなんとなくわかるように、顔は多くのことを物語っているわけです。その顔をさまざまな角度から考えてみたいと、1995年に「日本顔学会」を発足させたのが顔学の始まりです。

◎◎顔学は日本発と聞きましたが、外国には同様の学問はないのですか？



平均顔

銀行員13人

のヨーロッパには、骨相学や観相学など、顔学に相当する学問がありました。脳機能局在論といって、脳の部位ごとに違う機能を担っているとして、例えば、額が広いと頭がいいとか。あるいは、ある動物に顔が似ていれば、性格もその動物に似るとか。こうした根拠のない言説が中途半端に科学的な装いをもつことで、次第に顔の優劣を科学的に決めるという方向へと進んでいった。結果、顔で民族の優劣を決める差別へと結びついていったのです。

現在でも、美人研究は学問の世界ではタブーですが、顔の研究に踏み込むというのは危険な側面をもっています。しかし、顔という大変身近で関心の高いテーマを学問が避け続けているは、巷の俗説がはびこる一方だと思いい、真正面から顔を取り上げたいと思ったのです。

顔学が認知されてきた背景には、通信技術の進展によって、電話やメールなど顔を見せない、つまり「匿名」によるコミュニケーションが増えてきたことがあると思います。コミュニケーションの仕方が変わってきたことで、顔のもつ意味が変容してきたのではないかと。最近、電車の中で化粧をする女性が増えていますね。普通は人目を気にするものですが、彼女たちにとっては、乗客の顔も、週刊誌の吊り広告に並ぶ顔やテレビに出てくる顔と同じで、無反応な顔でしかない。つまり「本当の顔」ではないのでしょうか。人前で化粧をするのは、テレビの前で化粧するのと同じ感覚なのかもしれません。そういう社会における顔をめぐると

見られる側と見る側の関係が、顔をつくる

から顔を取り上げたいと思ったのです。

顔学が認知されてきた背景には、通信技術の進展によって、電話やメールなど顔を見せない、つまり「匿名」によるコミュニケーションが増えてきたことがあると思います。コミュニケーションの仕方が変わってきたことで、顔のもつ意味が変容してきたのではないかと。最近、電車の中で化粧をする女性が増えていますね。普通は人目を気にするものですが、彼女たちにとっては、乗客の顔も、週刊誌の吊り広告に並ぶ顔やテレビに出てくる顔と同じで、無反応な顔でしかない。つまり「本当の顔」ではないのでしょうか。人前で化粧をするのは、テレビの前で化粧するのと同じ感覚なのかもしれません。そういう社会における顔をめぐると



平均顔

プロレスラー11人

さまざまな現象を見ることも、顔学の範疇にありません。◎◎なるほど、顔学というのは、人間のコミュニケーションのあり方を見ていく関係学ともいえますね。原島●顔を通じて人間を探る学問、つまり人間学と言い換えてもいいでしょう。実は、ただによく、顔学は人相学と勘違いされるんです。先生に顔を見せると、自分の運命を見透かされてしまいそうで怖い、なんて真顔で言われてしまう(笑)。顔学では、その顔を見たらどうという印象をもつか、というところを扱うのであって、本人が本当にどうであるかまで立ち入るものではないですね。

◎◎先生のご研究でユニークなものに「平均顔」の研究がありますね。原島●顔の印象の研究をするなかで、個性を印象づける基準となるイメージの顔があるのではないかと考えたのです。20〜30人の顔を一

まざまな現象を見ることも、顔学の範疇にありません。◎◎なるほど、顔学というのは、人間のコミュニケーションのあり方を見ていく関係学ともいえますね。原島●顔を通じて人間を探る学問、つまり人間学と言い換えてもいいでしょう。実は、ただによく、顔学は人相学と勘違いされるんです。先生に顔を見せると、自分の運命を見透かされてしまいそうで怖い、なんて真顔で言われてしまう(笑)。顔学では、その顔を見たらどうという印象をもつか、というところを扱うのであって、本人が本当にどうであるかまで立ち入るものではないですね。

つのグループとして、コンピュータグラフィックスを使って平均化すれば、その集団の共通の特徴が抽出できるのではないかと。結果は驚くべきものでした。銀行員はいかにも生真面目な印象の銀行員らしい顔つきに、プロレスラーは攻撃的でいかついプロレスラーらしい顔に、一目でそれとわかる特徴をもった平均顔が生まれたのです。女子アナウンサーと客室乗務員の比較もしかり。平均顔を見せて、どちらが女子アナでどちらが客室乗務員かと聞くと、ほぼ全員が正しいほうを選ぶほどです。

◎◎確かに、それらしい顔ですね。平均顔というのはいずれも平均顔なんですね。

原島●ええ、平均化することで左右のバランスの取れた整った顔になる。でも、どこか印象が薄くて、魅力に欠けるでしょう？個性が打ち消されてしまうことで、印象が弱くなってしまうのです。つまり、顔の魅力というのは、個性の中にこそある。

一方で、そうした平均顔をステレオタイプ化するのも危険だと感じています。顔は時代によって変わるし、環境によっても変わるものです。だからこそ、顔学の出番があるのです。

例えば、目の間が離れていると、なんとなくのんびりした印象を与えるものですが、そういう顔をもって生まれた人は、その顔を見続けることで、自身の性格ものんびりしたものになる、ということもあり得る。顔が性格をつくってしまうんですね。あるいは、一時期、脱サラしてペンションのオーナーになるのがはまったことがありましたが、最初はとも見てもサラリーマンにしか見えなかった人が、しばらくすると髭を生やしたりして、ペンションのおやじらしい顔つきになったりする。まわりの環境や、着ている服装が変わるだけでも顔の印象はだいぶ違って見えるものです。

数十年前の高校生と現代の高校生の顔を比較しても、ずいぶん違ってきているんですよ。遺伝子レベルよりはるかに速いスピードで変化している。そうしたデータをもとに、未来人の顔のシミュレーションをしたところ、顎がどんどん細くなって、頭デッカチな異様な顔になりました。実は私の顔は典型的な未来人の顔なんですけどね笑。



◎◎環境や意識が顔を変えてくれるのですか？

原島●実際に形が変わる場合もあれば、見る側、見られる側の意識で変わる場合もある。

モーフイングという技術を使ってみて実験をしたことがあるのですが、ある女性に、理想の顔の女優を聞くと、若いころの岸恵子だということで、その女性の顔にコンピュータグラフィックスを使って岸恵子の顔を使ってみると、10%、20%、30%加えた合成写真をつくったのです。逆に、

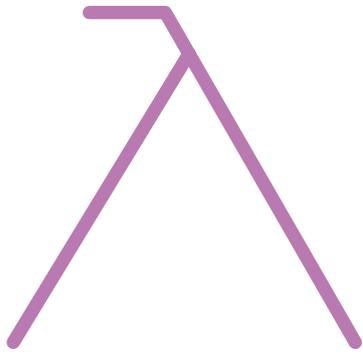
岸恵子よりも目を小さく、口も小さくといった具合に、マイナス10%、マイナス20%の顔もつくる。で、本人の写真とそれらの写真を並べて、「あなたの本物の顔はどれですか？」と聞いたところ、彼女が選んだのは10%岸恵子が入った顔だったのです。つまり彼女の意識の中では、それが自分の顔なんです。自分に理想を重ねられるというのは、心が健全な

のだと感じました。

さらに、面白いことに、彼女と対話するなかで、僕自身も、10%岸恵子が入った写真が本当の彼女に見えてきたのです。つまり、顔というのは、見る人と見られる人の関係で成り立つものだという事です。よく週刊誌の写真なんかで、笑っている顔の写真の横に、「ふてぶてしく笑っている」と書いてあればそう見えるし、「にこやかに笑っている」と書いてあれば、そうも見えるのと同じこと。それくらい、顔というのは客観的に見ることが難しいものなのです。

◎◎確かに、よく知っている人の顔というのは不思議と魅力的に見えるものですね。

原島●同窓会で何十年かぶりに同級生に会ったときも面白いことに気づかれますね。最初は、ずいぶん老けたと驚くのに、30分も話していると、「昔とちつとも変わらないなあ」なんて言い合うようになる。表情や癖は変わらないので、若いころのイメージを重ねて見えてしまうんですね。つまり、いいイメージをもたれていれば、いい顔に見られるわけです。いい顔をつくるというのは、心が次第ということなのかもしれないですね笑。



原島 博(はらしま・ひろし)
1945年東京都生まれ。'73年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。ヒューマンコミュニケーションメディアの研究者であり、「顔学」の研究者としても知られる。現在、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授、情報理工学系研究科教授兼担。東京大学コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム代表。近著に「感じる・楽しむ・創り出す 感性情報学」(工作舎)、「工学基礎 ラプラス変換とz変換」(数理工学社)など。

